

# 木漏れ陽

# 2月

令和2年2月25日第59号

発行佐賀市教育研究所

発行責任者 所長 松島正和

## 「通常教育がもっと障がい児に向き合って寄り添う」ために

2012年中教審から「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進（報告）」が示されました。

インクルーシブ教育システムの構築のために特別支援教育を着実に進めていく必要があること、特別支援教育を進めていくことは全ての子どもにとってよい効果をもたらすものであることが述べられています。

基本的な方向性として次のように示されています。

『基本的な方向性としては、障がいのある子どもと障がいのない子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきである。その場合には、それぞれの子どもが、授業内容が分かり学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けていけるかどうか、これが最も本質的な視点であり、そのための環境整備が必要である。』

佐賀市の特別な支援が必要な子どもの実態についてみると、平成25年から令和元年の5年間で特別支援学級は小学校81学級から132学級に、中学校は33学級から44学級に増加しています。当然、交流学級で学ぶ子供も増加します。また、通常学級在籍の中にも特別な支援が必要な子どもが複数名いることは先生方も実感されていることでしょう。

各教科等の学習指導要領にも障がいのある児童生徒に困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫をすることが明記され、解説にその手立てが具体的に示されています。

つまり、**全ての教員に特別支援教育の視点を取り入れた授業を展開していく力が求められています。**

考えてみると、人にはそれぞれ認知の特性（強み弱み）があります。したがって、特別支援教育を進めていくことは全ての子どもにとって優しい教育であることは自明のことです。

発達障がい等の影響で、視覚、聴覚、ワーキングメモリー、情報処理能力等に特性がある子どもが複数名いる学級での一斉授業では、次のことに気をつけて授業を展開する必要があります。

### ☆無駄な言葉を省き、一時に一事で短く指示発問をする。

長い指示発問、言い直すたびに言葉が変わる指示発問では、子どもが混乱する。

▲「Aして、次にBして、そのときXに気をつけて、最後にCしなさい。」

○「Aします。」（確認） 「Bします。」（確認）・・・

### ☆具体的な指示発問をする。

教える側のイメージは、具体的な言葉（基準を示すなど）にしないと伝わらない。

▲「丁寧に書きなさい」→○「線からはみ出さないように書きなさい」

▲「大きな声で言いなさい」→○「教室の・・・さんに聞こえるように」

▲「一生懸命がんばれ」→○どこをどうすればいいのか示す。

### ☆励まし続ける。

困っているのは子ども自身。その子の成長をとらえて、ほめて励まし続ける。

▲「6年生だから自分で考えなさい！」→○教える、取り組む姿勢・できたところを見つける、ほめる。

本稿のタイトルは、国立特殊教育総合研究所（現 国立特別支援教育研究所）初代所長 辻村泰男の著書「障害児教育の新動向（1978年）」で示された言葉であり、インクルーシブ教育システムの構築実現を願った言葉です。

「これ以上に障害児教育を推進するには通常教育がもっと障害児に向き合って寄り添ってくれないと駄目だ。」

「通常教育の守備範囲がもっともっと広がって、障害児も受け入れてほしい。もしそうなるなら、特殊教育（特別支援教育）なんてなくなってしまってもよいと思う。」

（柘植雅義「特別支援教育－多様なニーズへの挑戦」2013年）

辻村の言葉から40年近く経ちました。私たちは、彼が願った障がいのある者と障がいのない者とが隔てなく学ぶことができる教育の実現にどれほど近づけることができているのでしょうか。

私たち教育に携わる者の最も重要な仕事の一つです。

（学校教育課 指導主事 森 隆久）

## ■個人研究の実践を教育実践研究論文に応募

自分の研究主題に基づいて1年間研究を積み重ねた成果は、次年度5月に弘済会の教育実践研究論文に応募します。今年度応募した個人研究（昨年度の取り組み）の審査結果は下記のとおりです。佐賀市の先生方の教師力向上に資す内容で、参考になる取り組みがたくさんあると思いますのでぜひ参考にしてください。

学校名	氏名	研究主題等	審査結果
赤松小	山口純平	学級生活の楽しさを見出し、よりよい学級をつくろうとする子供の育成～学級活動の実践を重視した自主的・実践的な活動を通して～	柳川善光 教育特別賞
高木瀬小 現三田川	石丸稚菜	外国語とのよりよい出会いを図るための接続のあり方	佐教弘 教育賞
高木瀬小	江口貴文	算数科における交流活動のあり方とその効果を探る ～低学年におけるペア学習、グループ学習を通して～	入賞
鍋島小	富永美奈子	社会の一員として主体的に行動しようとする子どもの育成 ～キャリア教育の視点に立った学級活動の実践を通して～	入賞
春日小	江頭渉吾	地域を愛し、誇りを感じる児童を育てる学習指導方法の研究 ～地域の人・もの・こととの関わりを通して～	入賞
思斉小	井田丈嗣	児童がいきいきと学び続け、技能を向上させることができる体育科授業～体育科がめざす資質・能力を育む教育課程の工夫を通して～	入賞
思斉小	中山ももこ	単元を見通しながら意欲的に器楽を楽しむ児童の育成～話し合い活動による単元構成やグループ活動を支える教師の関わりを通して	入賞
北川副小	古賀貴美子	一人一人が生き生きと輝き、自他の違いや多様性を認め合う学級を目指して～考え、議論する「特別の教科 道徳」を中心に～	入賞
北川副小	高野晋輔	自分の考えを持ち、伝え合い、考えを比べ合おうとする子供の育成 ～国語科を中心とした指導の工夫～	入賞

■令和2年度の個人研究は、4月に募集する予定です。教師力向上のチャンスです。日ごろの実践をまとめてみられませんか。（権藤順子）



### 「差別事象に学ぶ」

「自分の責任でないことに苦しんできた。代々続く差別は厳しく辛いものである。」

これは、ある差別事象の報告会で、前解放同盟佐賀県連合会委員長さんが発せられ、今もわたしの心に残っている言葉です。

そんな中、賤称語を用いた差別事象が後を絶ちません。そこで、改めて佐賀市内で起きた差別事象の報告書を見てみると、その中に次のことが記されています。

部落問題学習を実践するにあたって、集団づくりが重要な基盤としてある。

これまでの実践の成果を継承しながらも、子どもの実態をより厳しく捉え、子どもたちがどのような価値観でつながっているのか、お互いどのような見方をしているのか、どのような意識を持っているのか分析し把握しなければならない。

子どもたちの意識の中にある「できる、できない」「上手、下手」という人の一面で、その人間性を決めつけてしまうような意識と、部落問題で学習した身分制度の構造と短絡的に結びつけてしまうようなことがないよう、また、「言葉の一人歩き」につながるような知識中心の学習にならないよう、子どもの実態や集団の課題と重ねながら実践していかなければならないと考える。同時に、学習内容が子どもたちの発達段階と掛け離れたものになっていないか、また、学習内容の系統性はどうかなどの視点に立ちながら、見直しをしていかなければならないと考える。

先人が残した事象発生時の反省に立った思いを、今一度見直し、継承して行くことが大切ではないかと思いました。  
(学校人権・同和教育指導員 桑原 玄二)

# 平成31年度佐賀市教育研究所員会公開授業(外国語活動・外国語)

- 新規事業 今年度、研究所員会のあり方を大きく見直し、課題研究を来年度から必修化される外国語活動・外国語とプログラミング教育の2本に絞りました。また、例年行っていた1月の研究発表会を、職員の皆さんが参観しやすい公開授業の形に変えました。  
外国語活動・外国語のテーマ「文科省がめざす小学校外国語教育の理解と連携への意欲に繋がる研究実践」

- 1 期日1 **令和元年11月29日(金) 5校時**
- 2 授業者 **北川副小学校 3年4組 川内丸友子先生**
- 3 単元名 「〇〇さんをハッピーにするカードを送ろう！」
- 4 授業研究会 司会 北川副小 長尾遼先生 共同研究者説明 北川副小 内堀瑛太先生  
助言 富士小教頭 吉田まりか先生 春日北小 川原浩子先生
- 5 授業研究会アンケートより 28名参加
  - ・授業だけでなく掲示物も役に立った。
  - ・単元を通して友達とかかわっていく中で外国語に慣れ親しむことができそう。
  - ・コミュニケーションは学級経営に大きな影響を与える。早速実践する。
  - ・小学校の授業を初めて見せてもらった。ゴールを意識して準備された授業で参考になった。
  - ・今後も異校種間の交流を続けていただきたい。

- 1 期日2 **令和元年12月5日(木) 5校時**
- 2 授業者 **開成小学校 5年2組 内山絵里子先生**
- 3 単元名 「ドリームスケジュールを伝え合おう」
- 4 授業研究会 司会 春日小 於保綾先生 共同研究者 鍋島小 林田真美子先生  
助言 成章中校長 中島裕二先生 富士小教頭 吉田まりか先生  
春日北小 川原浩子先生
- 5 授業研究会アンケートより 36名参加
  - ・単なる文型練習ではなく、切実感のある子供が本当に伝えたいことを題材に選ぶことの大切さを感じた。
  - ・評価について、何を基準にするかで他者を意識することがキーになるのでは。
  - ・授業内容だけでなく、これからの外国語活動のありかたを教えてもらった。
  - ・中(小)学校の先生と話ができて視野が広がった。参観の視点が異なるので、連携をもっととり、方向性を小(中)学校と共有すべきだ。

# 平成31年度佐賀市教育研究所員会外国語活動・外国語発表会

- 経緯 研究所員が取り組んだ成果を「佐賀市外国語教育研修会」の中で発表しました。今年度の実践をもとに来年度から全面実施となる新小学校学習指導要領の目標やめざす授業の具体例と授業づくりのポイント、新しくなる評価の観点などについての助言もいただきました。
- 期日 **令和2年2月20日(木) 大財別館**
- 発表内容  
研究の柱 1 新学習指導要領における外国語教育の理解 2 授業改善 3 小中連携
  - ・特に 単元作りの工夫〈教科横断的 ゴールを見据えたアレンジが必要〉
  - ・リアルコミュニケーション〈相手意識・目的意識が明確な本物の言語活動 切実感があり、やりとりの喜びが感じられることが大切〉





# 平成31年度佐賀市教育研究所員会公開授業(プログラミング教育)

- 新規事業 今年度、研究所員会のあり方を大きく見直し、課題研究を来年度から必修化される外国語活動・外国語とプログラミング教育の2本に絞りました。また、例年行っていた1月の研究発表会を職員の皆さんが参加しやすい公開授業の形に変えました。

## 研究テーマ

「プログラミング的思考を育む授業実践～プログラミング授業実践はじめの一步～」

- 1 期日 **令和元年 11月18日(月)**
- 2 授業者 **東与賀小学校 2年1組 黒岩秋穂先生**
- 3 単元名 「くりかえしのあるお気に入りのリズムを作ろう」
- 4 授業研究会 司会 循誘小 野崎慎悟先生  
記録 鍋島小 橋爪健太先生



※お二人も部内で授業を行いました。

野崎先生「6年1組 修学旅行で学んだ内容を5年生に伝えよう」

橋爪先生「5年2組 水産業のさかんな地域」

助言 みやき町立北茂安小 大家淳子先生

- 5 授業研究会アンケートより (20名参観)
  - ・学習指導要領に例示されている単元としては、総合的な学習の時間以外は、5年生算数(正多角形)6年生理科(電気)だったので2年生の音楽での実践に感心した。
  - ・プログラミング教育のネックは、教科教育の中で活用しなくてはならないこと。ロボットを動かしているのがプログラミング教育にならないこと。しかし、はるか昔からプログラミング的思考と同じような活動は、学校現場で行われているので体系化するだけでもよいのでは?とも思う。
  - ・試行錯誤した結果が分かるようなワークシートが必要。
  - ・授業前までに必要な準備やタブレットPCを使うときの年度初めの学級全体での指導等実感できた。

# 平成31年度佐賀市教育研究所員会プログラミング教育発表会

- 経緯 研究所員が取り組んだ成果を「プログラミング指導教員養成研修参加者実践交流会」で発表しました。プログラミング教育の基本的な考え方・来年度の年間指導計画等について実践交流会の各グループ代表者発表の後、所員会の研究のあゆみを紹介しました。
- 期日 令和2年1月7日(火) 赤松小学校
- 内容 研究所員(循誘小 野崎慎悟先生 東与賀小 黒岩秋穂先生 鍋島小 橋爪健太先生)の実践を橋爪先生が発表し、顧問の大家先生から助言をいただきました。



各教科の目標に到達するための手段としてプログラミング教育がなされるので、教師は、各教科等の目的、プログラミング教育の目的を明確に理解してから実践することが大切である。市全体として共通理解が必要なので広めていただきたい。(大家)

参加者のうち32名からアンケートをいただきました。(以下抜粋)

- ICTが表現手段という発想。工夫次第で様々な教科に応用できる。
- ハイパーリンク、デジタル地図など苦手な先生方にも無理のない実践。
- スクラッチありきではなく教科を通してプログラミング的思考を育む実践がよかった。
- ◇教科のねらいとプログラミングのねらいのバランスが課題。
- ◇教師がプログラミング体験をする時間の確保。

※要望がありました。佐賀市「71 全校共有フォルダ」のご活用、授業公開のご参加をお願い致します!